

(二〇一五年 第一五回黄順元文学賞 最終候補作)

立 冬

キム・エラン
(辻本武 訳)

夜の一二時を過ぎて、妻が壁紙貼りをしようと言った。

—今？

—うん。

ソファでぐずぐずしていたが、「うん、分かった」と言つて起き上がった。妻が何かまず「しよう」と言うのは、久しぶりのことだった。ベランダに行つて、収納ロッカーから壁紙を取り出した。ちよつと前に町の大型スーパーで買った、自分で出来る壁紙貼り、だった。一ロールで二万何千ウォン。幅は私の肩幅ぐらい、長さが1m以上で、手に伝わる重さかなりあつた。足の裏が汚れるのが嫌で爪先立ちをして説明書を読んだら、何だか面倒くさい気分になつて横目で居室の明かりを見た。そして壁紙を持ちながら大声で叫んだ。

—本当に今やるのか？

先月、母がちよつとの間わが家に泊まり込んだ。夫婦二人とも忙しいので、家事をしてもらおうという名目だった。荷物を下ろした初日から、母は家の中のあちこちを意欲的に掃いて拭き掃除した。郵便物を整理し、ほこりの被った扇風機を分解して羽根の一つ一つを拭き取り、しおれたゴムの木に水をやった。豚肉にウズラの卵を混ぜて醤油で煮詰め、チリメンジャコと青唐辛子を炒めて家の中に辛い臭いを漂わせ、海苔を焼き、ゴマの葉を漬けて寝かせ、冷凍室を整理した。妻はそんな母の姿をぼんやりと見ていた。まるで年寄りの悪意のないお節介や小言を黙々と耐え忍んでいるようだった。いや、耐え忍んでいるというより、意識できなかつたと言うべきか、それとも意識しようとしなかつたと言うべきか。一体何を言っているのわからないようで、向こうの方で一生懸命動いている母の姿を妻は素直に見ることが出来なかつた。二人がそうだったから、私は家でやることが多かつた。

母がわが家に来て十日ぐらい経った。真夜中に台所から「ボン！」という音がして、あわてて飛んで行ってみると、母が赤黒い液体を頭から被ったまま床にへたり込んでいた。まるでテロ犯の横に偶然いて、肉片と血の洗礼を受けたみたいだった。ぼうつとして気が抜けたような姿だった。手には一本の円筒形の瓶を持っていた。何日か前に、家の前の保育園から送ってきた覆盆子（トックリイチゴ）の瓶だった。送り返すつもりで手も付けずに置いていたものを、母がいきなり蓋を開けたために中身が爆発したみたいに噴き上がったのだった。赤黒い液体は母の白いＴシャツだけにな

く、テーブルや床、電子ジャーや電気ポットにもごちゃごちゃに飛び散っていた。特にテーブルと向かい合っている壁の状態が深刻で、薄いオリーブ色の壁紙の上に広がる真っ赤なまだら模様は、まるで誰かが隣人を侮辱するために殴り書きしたみたいだった。

—アイゴ、もつたいないと思つて、どうしたことだろう。

母が戸惑つた顔で、周囲を見回した。

—いや、わたしや喉が渴いて：：お前たちが全然飲まないのだから：：。

私はあわてて母を抱え起こした。

—大丈夫？ お母さん。どこか怪我しなかつた？

母は「わたしや年取つて、もうろくした」「人が食べられるものを売らねばならないものを、こんなものを作つてどうするっていうのか！」「瓶にガスが溜まっていたみたいだ」などと繰り返した。直ぐに浴室に行つて雑巾を濡らさず、キッチンタオルを何枚も取り出して床から拭いた。いつもの母なら、雑巾を洗つて使えばいいのに何で紙を無駄遣いするのかと怒るところだった。

—置いておいてよ、お母さん。僕がやるから。

中腰の腰をさらに下ろして、ちらつと妻を見た。「そうだよなあ、お前。僕たちがすればいいんだよね？」そつと同意を求めたのだった。しかし、その時まで私の横でじつとしていた妻が非常に低くて品のない口調で、意外なことを言った。

—この、ばか：：。

母が床を拭いかけた時に、頭を上げて妻を見た。しばらく静寂が流れた。壁面には赤くねばねばした液体が縦に長い跡を残しながら、ゆつくりだらりと流れて落ちていた。妻は気まずい雰囲気など気かけずに言葉を続けた。

—これはどういうことなの。

—ミジン。

もう止めるという意味でそつと袖を引つ張った。そうすると妻は、怒っているのか理解を求めようとしているのかよく分からない顔で、悲しみのこもった悲鳴をあげた。

—みんな目茶苦茶になってしまったじゃないの。

私たちがここに引つ越して来たのは、昨年春だった。分譲面積二四坪、実面積一七坪で、築後二〇年のマンションだった。近頃のように借金をして家を買うのはおかしなことだとみんなが言っていたが、競売で安く出た物件があつて、あきらめ難かった。今の韓国は大抵の場合、売買価とチョンセ（一定額の保証金を預けて不動産を一定期間借りる韓国独特の制度）の保証金の差が大きくない社会状況になっており、またこちらが希望する条件のチョンセの家を探すのが難しかっただけでなく、引つ越しといえばうんざりしていたところだった。長く悩んだ末に、妻と私は結局この家を買うことにした。家の価格の半分以上はローンを組んだ。何十年間も毎月返さねばならない元金と利子を思うと、心が重くなった。それでも人の財布ではない私の空間に注いだお金だと思えば、

憂鬱感は和らいだ。誰かが、そのマンションはローンがある以上やはりあなたの家ではなく他人の持ち物だと言って聞かせても、どうしようもないことだった。妻は、これから息子のヨンウがマンション内にある保育園に変わり、外に出て通園しなくてもよくなったと言って喜んだ。自分はそれが一番よかったと。それに近所にサービズ施設がたくさんある上に、ソウルより空気が澄んでいて気に入ったと言った。

—ヨンウもここがいいって。

一人でブロックを積んだり絵本を読みながらよく大人の会話に口を挟むヨンウが、その日も口出しした。

—どうして？僕が、ここが何故いいって？

その頃は遊び盛りで、とんでもない言葉を浴びせるヨンウに、妻が期待のこもった口調で聞いた。「親から何をしてもらったと思っているのか」と聞く表情は、満たされていた。ヨンウはいつものように口に生唾をつけたまま、真つ赤な舌を回転させて天真爛漫に答えた。

—うん。ブルンブルンがものすごく多くて、とても素敵。

ペランダから八車線道路に通勤の車が長い渋滞の列を作っているのを見て、言ったのだった。

しばらくの間、家を持ったという事実には戸惑った。名義だけが私のものであるだけで、相変わらず私の家ではないからだった。二〇年余り借家をさすらつて来て、今ようやく小さな根を下ろした

気分。種から生えた根の一筋が地中の暗闇を突き抜けて出てくる時、周囲に広がる微熱と溜め息が私の体にもそっくりそのまま伝わる感じだった。帰宅して熱い湯でシャワーを浴びてベッドに横たわると、よくやったという自負と奇妙な不安が一度に押し寄せてきた。どこかにやつとの思いで到着した気分。円の中心ではないが、だからといって円の外に押し出されたのでもないという安堵が、一斉に疲労として押し寄せてきた。その疲労の中にはこれからやつて来る疲労、あるいは今は何の疲れか分からないものも含まれていた。それでなるべく悪い考えはしないようにした。この世で一家の主人たる者が経験する不安のうち、私は少しましな不安を選んだのだと信じた。そしてそれはしばらくの間は事実であった。少なくとも私には、何かを選択する自由というものがあるのだから。マンションの売買契約書にハンコを捺してから家に帰ってテレビを見ていると、芸能番組でお笑い芸人たちが「新聞紙ゲーム」をしていた。足を踏む面積がだんだん小さくなる空間で、どれだけ多くの人がどれだけ長く耐えられるかというゲームだった。芸人たちはお互いの体に絡みついたまま必死になり、滑稽な表情になった。そうして結局何チームかは、相手の体重に勝てず新聞紙の外に倒れて脱落した。その時は何となくテレビの前に座り、缶ビールを飲みながら笑っていたのだが、今の私とそのゲームの参加者になったような気分だった。半分の半分、また、半分の半分の、そのまた半分、の大きさに折られた紙の上に一本足で立ったまま家族を抱いてぶるぶる震えている……。だけど結局生き残ったといつてカメラを見て笑っている……。大学の同期の何人かは私に、もう家を持ったのかと羨ましさを交えた祝いの言葉を送った。その度に私は「家を持つてみた

ら、すぐにハウスプア」と照れ臭そうに言い訳した。ある奴は「俺はただのプアだが、お前はハウスプアだから、どれほど恵まれているか」と言い返した。マンション入居後、両家の両親や友人たち、職場の同僚を招待して、何回か引越パーティをした。新しい人たちとにぎやかに食事をし、酒を酌み交わし、この家が自分のものであることを、既成事実化しようとする努力をした。そういう時は私たちが債務者だという事実が現実とは思えなかった。マンションの売買契約書と銀行ローン関係書類に記された私の名前が仮名のように感じられた。深夜に尿意で目が覚めてトイレに行く時、浴室のドアの前から（韓国ではトイレと浴室が一体になっている）明かりが消えて薄暗くなった居室を長い間見ている。あるべきものが全てその場所にあるのか、大切にしておかねばならないものが全てそのままにあるのかを確認した後、寢床に入った。

妻は念を入れて家の中をきれいに整えていった。引越してからは、暇さえあれば「狭い家のためのセルフ・インテリア」や「家具リフォーム」「DIY」の情報を調べてさらに整えた。以前から、定着への願いは、私より妻の方が強かった。妻は大学時代ずっと寄宿舎で暮らし、卒業後その時代に盛んだった学習指導雑誌の教師として働いていた時は、布団代わりに銀箔シートを持って24時間営業の読書室（元来は受験生用に貸す勉強スペース。韓国独特のもの）を転々とした。このシートは本来庭で肉を焼いたり遠足に行く時に広げるものであるが、持ち歩くのに便利で捨てるのも簡単という理由で、毎日これを敷いて寝たのだった。そしてまた妻は九級公務員試験に三回受け

て三回とも落ち、公務員になる代わりに鷺梁津（ノリヤンジン）公務員試験対策塾で事務員として働いた。結婚後は不妊治療を受け、二回流産した末にヨンウを産み、五回の引越しの末に借金をしてマンションを買った。全てこの十年間、無我夢中でやってきたことだった。マンションを購入してから妻は休日の度にベランダに出て、何かを切り、塗り、組み立てていた。私たちが十年近く使ったベッドや椅子、テーブルや収納棚を、リフォームした。褐色の椅子にクリーム色のペンキを重ね塗るとか、古くなったテーブルにみかん色のペンキを塗るとかして雰囲気を派手にした。妻はヨンウがのこぎりや釘、金槌に近付かないようにベランダのドアをきっちり閉めて仕事した。ヨンウは母親のしていることが気になって、ガラス窓に鼻を押し付けて泣いたり駄々をこねたりした。そんな時は私がヨンウを抱いて児童公園に連れて行った。引越してから何ヶ月の間、わが家ではペンキと接着剤、つや出し剤の臭いが止まなかった。「北欧スタイルの家具」や「スカンジナビア・パブリック」を探して価格に落胆した妻が、自分なりに選んだ自策策だった。妻には、定着したという事実だけでなく、実感したという事実が必要なのだった。使い勝手と必要性しかない空間はもう嫌になったかのように、そして見てくれの悪いものや買って来たものももう沢山だというように。妻は品物からは機能を取り去った残りを、そしてまた人生からは生活を取り去った残りを、すなわち遊びや余裕を所有したかったのだった。

妻がインテリアに最も念を入れた空間は、殊に居室と台所であった。妻はインターネットのショ

ツピングモールで購入したパブリック素材の二人用ソファを置いた。充填剤に建築廃木材や小玉クッション材を使った低価のソファだった。しかし私は妻の選択に異議を言うことはなかった。妻が私に意見を求めてきたら「悪くないよ」「いいねえ」と、淡々と答えるのみであった。古びたマンションがごぢんまりとまとまった感じになるのが嫌でなく、亡くなった父がよく言っていたように、男は家で壊れた物をちゃんと直し、故障したところだけを手入れすればいいと思った。妻はソファの横に洒落たゴムの木も一鉢置いた。それはヨンウが植木鉢にある石を舐めたり、葉っぱをちぎって食べたりしなくなったから置けるようになったのだ。妻は自分で作った木の棚に「Love Happiness」という英語が書かれた、何に使うのか分からないパステルカラーの空き缶を置いた。一方壁面には針金と可愛らしい木製クリップを使って洗濯物を干すように家族写真を掲げ、それでもまだ寂しいのか、木の上の方に「ウォールステッカー」を貼った。

台所と向かい合った小さな部屋はヨンウのために用意した。ヨンウも初めて持つ自分の部屋だった。妻は、いつも隠れるのが好きなヨンウのために布を切ってインディアンテントを作ってやった。ヨンウは赤ちゃんの時からどこなりと這って行ってゴミを拾って食べたり、落ちている髪の毛をじっと見るがあった。妻はヨンウの部屋の窓に「ロボカー フォーリー（車を擬人化した韓国の漫画）」が描かれたスクリーンロールを付け、部屋のドアには「コロロハングルチャット」を貼った。「コロ」の欄には「강아지（子犬）」、「コロ」の欄には「나비（蝶々）」が出てくる印画紙だった。その

頃のヨンウはちようど字を習ったばかりで、字に馴染んでいた。しかし勉強に全く素質がないのか、まだ幼いからか、字を書けと手に鉛筆やクレパスを握らせると、妻がやつの思いで掃除した床を汚した。普段大声を出すことのない妻は、自分が苦勞して整理した空間を子供が散らかす度に大声を張り上げた。ある時はちよつと度が過ぎるのではないかと思えるぐらいであった。それでもヨンウは毎日あらゆるものに唾をつけ、絵本を破り、音楽が流れれば体を左右に揺らし、椅子の下の狭い空間に入って遊んだ。そして時々三角のテントに入って、ぶつぶつ無駄口をたたきながら昼寝をした。誰と喧嘩しても勝ちそうにもない顔で。そつと覗いて見てやると、胸がしびれるくらいに平穩な顔で寝ていた。不思議なことはそのようにちよつと眠つたとしても、目を開ければその間に体が太つたように印象が変わることだった。子供は本当に大きくなるのがもつたいたくないくらいに早く成長する。そしてそんな経験をして初めて、私は季節がする仕事と時間が受け持つ働きを知ることが出来た。三月が何を整えるのか、そして七月がするどんな仕事をするのかを知ることが出来た。五月あるいは九月も同じことだった。

最初にこのマンションを見に来た時、最も印象的だったのは壁面だった。ぼろぼろで散らかっている所帯道具の間でたった一つだけが「美しさ」を主張し、必死の努力で豪華に見せようとしているようだった。そこには一時流行っていた花柄の壁紙が貼られていた。魅力を通り越して気色悪いくらいのチューリップ一輪一輪が、山のようにいっぱい刷られた壁紙だった。白地の上には黄色い

染みと、ハエの糞なのか何なのか分からない黒い点が飛び散っていた。妻は気難しく厳しい表情で、台所の壁面をじっくり凝視した。そうして「私がこの家の主人だったら、ここにシンプルでさっぱりした壁紙を貼るだろうに。」とつぶやいた。重要なのは収納と配置、配色であり、インテリアについて間違った理解が正にこれなのだ、と全く専門家気取りであった。育児やら仕事やらで自分は美容室も行けないのに、そう言うのだった。

—僕たちの家も、全然気を使ったくないじゃないの？

妻は目を剥いて言い返した。

—子供がいるから、そうなっているのよ。

暮らしと養育について、私が少しでも非難する口ぶりしたら、妻はひどく敏感に反応するのだった。

—この家にも子供がいたみたいだよ。

台所の蛍光灯のスイッチに貼りついたキャラクターシールを指差すと、妻がぶつきらぼうに言った。

—私たちの家はこの家より小さいじゃない。狭い家はどんなに整理しても、どうしようもないのよ。

入居前に妻は一番最初にその壁から手を付けた。町のインテリア店行って台所と居室の壁面を

すべて白色にして、流し台に向かい合う面だけはオリーブ色の紙を貼ってくれと注文した。白色で統一された空間のなかでのオリーブ色の壁面は、断然、ポイント' となった。妻の言う通り見た目にさわやかで、家が広く見えた。妻はその壁の下に四人用テーブルを置いた。アイボリー色の脚に淡い柿色の天板を置いた暖かい感じのするテーブルだった。私たちはそれを食事用兼喫茶用、そして読書用に使った。妻はテーブルの片側に電気ポットと、緑茶やハーブティー、総合ビタミン剤、ピーナツ類を盛った皿を置いた。透明容器に入れたコーヒー豆の横のところには、見るだけでも何だか誇らしい気分になるコーヒーグラインダーを置いておくことも忘れなかった。私たちはそのテーブルの周りに座って、毎日ご飯を食べた。たまにお客さんが来られると居室で食膳の用意をするが、私たちだけでは大抵このテーブルを利用した。妻と私は背もたれのないベンチ型の椅子に、ヨシウは赤ちゃん用の折り畳み式のテーブル椅子に座ってスプーンを持った。そして、そのような些細で取るに足りないような一日が積み重なって季節になり、季節が積み重なって人生になるということを学んだ。浴室（韓国では浴室・洗面台・トイレが一体であるのが普通）のガラスコップに立てた三つの歯ブラシと、物干し台に干された各自の違った大きさの靴下、かわいい赤ちゃん用便器カバーを見ながら、そのような平凡な品物や風景が奇跡であり、事件であることが分かった。妻と私はテーブルでヨシウに食事をさせ、ヨシウが怒ってあきれた口答えをすることにポカンとなって笑ってしまい、そういう中でも親の権威を失わないために直ぐに厳しい表情を作った。ヨシウはそこで箸の使い方を学び、食べ物をこぼし、駄々をこね、椅子の下に這って入り込み、泣き、ピンク

の舌を動かして可愛い戯言を言った。すなわちその四人用のテーブルで、そしてテーブルと向い合っている壁の下で、二ヶ月前に家の前の保育園から送ってきた覆盆子液が正にそこで飛び散ったのだった。

妻と私は覆盆子液が爆発した日のことを特に口に出さなかった。母は次の日すぐに自分の家に帰り、私たちは普段とは違わない日々を送ろうと努めた。だから昨日のような一日、非常に長い一日、妻の言葉を借りれば「みんな目茶苦茶になった」一日を……。人がよくいうところの「時間」が、早回しのフィルムのように過ぎていく気分になった。風景が、季節が、世の中が、私たちだけを除外して自転する……。段々と自転の幅を狭めて渦を作り、私たち家族を飲み込もうとするように見えた。花が咲き風が吹く理由も、雪が融け新芽が吹き出る訳も、全てそのためではないか。時間が私たちでない他の誰かを一方的に味方しているように思えるのだった。

昨春、私たちはヨンウを失った。ヨンウは後進する保育園バスに轢かれて、その場で亡くなった。五二ヶ月。春だったから、夏という季節また秋や冬という季節を五回も見ることが出来なかった。よく親の胸元で痲癩を起して言うことを聞かずに面倒をかけたものだったが、ちようどそれぐらいの年齢の子供と同じように、どこで習ったのか親に抱きつく時にモミジのような手でとんとんと背中を叩いた。今はもう抱いてやることも触ってやることも出来ない子供だ。どんな手を使ったとし

ても、二度と叱り飛ばすことも寝かしてやることも、なだめてやることもキスしてやることも出来ない子供だ。火葬場で妻はヨンウを送りながら「行つてらっしゃい」ではなく、「お休みなさい」と言った。また会うことが出来るように、手で写真を撫でながら言った。

保育園の園長は営業賠償保険に加入していた。加害車両もやはり自動車総合保険に入っていて、私たちは保険会社を通して民事上の損害賠償をもらった。多いとか少ないとかという世間一般の尺度や単位で測ることの出来ない対価が支給され、保育園はこれで終わったと考えて、運転手を替え当時いた保育士まで首を切ったのだからこれ以上何を望むのかと問うているようだった。直接にはそう言っていないが、私たちに対する表情や態度がそうだった。私が保険会社の職員だという理由で、町では到底口にする事の出来ないような噂が飛び交ったのも、その頃だった。最初は聞いても信じられず、全身が震えた。驚くべきことは、ある人たちはそれを本当に信じ込んでいることだった。妻は職場を辞めて家の中に閉じこもり、何もしなくなった。私は出来るなら全てのことを止めたかった。通帳には毎月マンシヨンのローンと利子が引き落とされた。マンシヨンの管理費や各種の税金、医療保険料、携帯電話料金もかなりのものだった。私の給料だけではとても賄えない額であった。その頃に保育園の車両の保険会社から連絡が来た。その人は落ち着いた口調で私を慰勞し、公式的用語を使って保険料支給の概要を説明した。そして私に一つの書類を差し出した。そこには私の名前を書く欄と口座番号を書く欄が空白になっていた。彼から説明されなくても、よく知

っている様式だった。そして、かつては私も彼と同じように事務的に処理するだけという表情で、誰かの悲しみと対面してははずであった。書類を前にしてしばらく何もしやべれず、タバコを続け様に三本吸った。間違つたことを直し、故障したところを直すのは一家の家長の仕事だ、私はそのように学び育つた。しかし私がある欄に口座番号を書いた瞬間、変な話だが保育園の園長を許す結果を生んでしまうような気がした。それから時間がどのように過ぎていったのか分からない。ただ頭に浮かんでくるのは、暗闇。仕事から帰って、カチャツツスイッチを押した時に台所の一方で泣いていた妻の顔、そしてまたカチャツツスイッチを押した時に居室の片隅に映る、肩を震わせている妻の輪郭だけだ。さらに頭に浮かぶのは冷蔵庫の中で発酵して白くなったキムチとラーメンに入れるとむかつく臭いを漂わせる卵、居室の床に落ちた褐色のゴムの木の葉っぱだけだ。時々妻はベランダの窓を眺めて、同じ言葉を繰り返した。

—あなた、ヨンウがいる所なんだけど。ここよりいい所のようにだわ。なぜなら、そこにはヨンウがいるから。

一度は妻が車輪付きカートを持って出かけて、十分ほどで戻って来た。何かあったのかと聞くと、妻は他の人たちが自分を見る、あなたはそんなことはないかと言った。それはどういふことかと聞くと、妻は他の人たちが何度も見る、子供を亡くした人がどんな服を着ているのか、子供を亡くした人も試食コーナーで食べるのか、どんなおかずを買い、どんな値段交渉をするのかをのぞき見るのだという。私がそんなはずはないと、神経質になっているとたしなめた。その後妻はインターネ

ットモールで買い物するようになった。家の外に出ることが段々減り、ベランダを眺める時間が長くなった。私はヨンウだけでなく、妻まで失うことになるのかと恐れた。

—おい、僕たち、引越しようか？

カチャツ—またスイッチを押した時、ヨンウの部屋のインディアンテントの中で立膝に頭を埋めていた妻に尋ねた。妻は涙で濡れた顔で何も言わずにうなずいた。次の日の、家の帰り道に町の不動産屋に立ち寄った。マンシヨンの時価は、去年私たちが買った価格より二〇〇〇万ウォン以上下がっていた。私は何も言わずに不動産屋を出て、タバコを続け様に二本吸った。結局マンシヨンを売るのを諦め、妻に「適当な家がないようだ」と言い繕った。もちろん私たちには一ウォンも触っていない保険金を通帳に入っていた。しかしそれは一文も使ってはいけないお金だった。一度も相談したことがないが、妻も私も暗黙のうちにそのように同意していた。

保育園から小包が来た時、妻と私は不吉で奇怪な品物ではないかと箱の隅々まで調べてみた。一体これは何のつもりなのか、ぴんと来なかったからであった。小包の外面に「長寿食品」という商号とともに「国産覆盆子原液百%」という文句が印刷されていた。箱の上のガラステープを剥すと、中から小さなカードが出てきた。カードには「送っていただいたご声援に感謝申し上げます。心豊かに秋夕（韓国のお盆）をお迎えください。太陽保育園」という常套文句が書かれていた。秋夕といえは、子供たちが保育園で手作りした松餅（秋夕の時に食べる餅）を可愛く包装して持たせるこ

とはあっても、こんなことは初めてであった。それにここがこの家だといふのか。私たちは直感的に、間違つて配達された品物だと思つた。ヨンウのことで悪くなつた評判をこんな風にして何とか変えようとしたようだった。それがこちらに配達されたのは、新任保母がミスしたせいなのか、それとも住所録を更新しなかつたせいなのか分からなかつた。妻は、この人たちはどうしたらこのように無頓着になれるのかと怒つた。知つていて送つたのなら悪いことだし、知らないで送つたのならもつと悪いことだと。私は落胆の心情で箱をじつと見つめた。そうなら小包を送り返すまで、みんなの目に触れない所に片付けておかねばならないと思つた。それは二ヶ月前のことだった。

台所の壁面に染みついた液体はかなりのもので、よく取れなかつた。濡れ雑巾で拭い、ナイロンたわしで擦り、化粧用綿棒にアセトンを浸けて注意深く叩いても無駄であつた。布巾で何度も拭いたところは比較的ぼやけるようになったが、染みは完全に消えることはなかつた。かえつて痕跡を消そうとすればするほど壁紙がよれよれになって、余計に目立つた。私たちは結局新たに壁紙貼りをするしかなかつた。

母が自宅に帰つてしばらく経つてから、妻と町の大型スーパーに行つた。妻と一緒に買い物するのは久しぶりのことであつた。蛍光灯や乾電池、工具を売っているコーナーを回り、色んな壁紙が積み上げられている陳列台の前に来た。棚の上に一般壁紙やセルフ壁紙、シート壁紙や韓紙がきれ

いに積まれていた。私たちはそのなかの「糊の付いたセルフ壁紙」を取り出した。製品説明書に「水に五秒間だけ浸ければ終わり」「壁紙貼りが簡単で楽しい」「既存の壁紙を剥す必要がない」という文句が書かれていた。何だか読むだけで自信が湧いてきて、もう壁紙貼りが終わったような気分だった。

—これにしようか？

妻が眉をひそめた。

—模様のないのがいいんだけど。

—この程度ならすつきりしてないか？

—他のもの、ない？

—こんな形は嫌いじゃなかったか、そうだろう？

—うん。

—それでもこれが一番シンプルなんだが。模様もいいし、特に傷もない。

—…。

—後でまた来るか？

妻は急に私の視線を避け、落ち着かない様子で「あなたの気に入ったものでいい」と言った。私は片手に壁紙を持ったまま、妻をじつと見た。今までインテリアのことなら一人でほとんど全てを決めてきた妻が、判断をこちらに押し付けてくることに不安になったからだ。さらに妻は早くその

場を離れたがつているように見えた。ちよつとおかしいなあと思つて振り向いてみたら、大体五〇ヶ月ぐらいの子供がカートに座っている姿が見えた。ねばねばしている小さな手に、いつもヨンウが喜んで食べていたゼリーを持っていた。

そして、それだけだった。壁紙を選んでいる間に生氣を取り戻した妻は、家に帰るとスーパーに行つたことなんかあつたのかと言わんばかりに、壁紙貼りのことをすっかり忘れてしまつた。関心が消えたのか、それとも意欲が減じたのか、分からなかつた。私が早く帰宅した日や週末に「今日、壁紙でも貼るか？」と聞けば、毎回「次に」「後で」と答えた。いつも流し台に食器を絶対に置きっぱなしにしたことがない妻の態度としては、おかしいことだつた。妻は食器の片付けを全て終えた後でも、食器の水気が完全に乾いた状態になるのを待つた。どんなことであれ、「すぐに始められる状態」がいいと。それでこそ何であれ次にやろうという気になると言うのだった。妻はブドウ一房を洗う時も、ブドウをベーキングソーダに浸けてから水道水で何度もゆすいだ。布巾やタオルも必ず過酸化水素水なのか過炭酸ソーダなのか私には分からない粉末を溶かして、白くなるまで煮洗ひした。ところがそんな妻が赤い液体で醜く染みがついた壁紙を、しかも乾いた血痕のように薄黒く変わった部分をずつと放置した。「大抵のことは僕一人で出来るけど、壁紙貼りはお前が手伝つてくれなければ。」と説得しても無駄だつた。いつの間にか私の方が面倒臭くなり疲れて、もう聞くことはなくなつた。そのようにずるずる引き延ばして二ヶ月になつた。ところが今日、土曜日なので夜

の十二時まで居室でテレビを見ていた私に、その時うとうととして瞼が閉じそのまま寝入るかと思っている私に、妻が壁紙貼りをしようと言ったのだった。

—おい、そこ、ちよつと持ってくれ。

—ここ？

—うん。

妻が巻尺の端を握った。巻尺の端が「コ」の字に曲がつて床にきつちりくつ付いておらず、途中ではみ出すかも知れなかったからだ。壁紙の上に膝を置いて座り、二m三〇cmぐらいのところ小さい印をつけた。実際の寸法より三cmほど余裕を持たせたのだった。

—こんなのが幾つ必要なの？

—三枚。

—だったら、もういい？

—うん。十分よ。

三等分した壁紙を居室の床にばあつと広げた。しわが全くなく、パリツとして綺麗だった。薄い黄色を地にして、小さく白い花がいっぱい咲いていた。妻は私が選んだ壁紙があまり気に入らない気配だったが、一方ではどれでも自分には関係ないという表情だった。オリーブ色の壁面にびつた

りくつ付けていたテーブルを持ち上げて居室に移した。それから妻と壁紙の両端を持って浴室に行った。浴槽にはあらかじめ生温かい湯を溜めておいた。紙を浴槽に浸けて糊がきくのをしばらく待ち、水を吸った紙を持って台所に移動した。濡れた紙が破れないように、ガラスを運ぶみたいに力を調節しなければならなかった。言葉通りの「協働」だった。壁紙を縦に長く立てて上の両端をつかみ爪先立ちすると、紙の端が天井のモールディング部分に届いた。私の胸の下あたりで紙の中間部分を持っていた妻が、私を見上げながら言った。

—うちの花婿は背が高いわねえ。

久しぶりに見る妻の微笑だった。しかし、ちよつと寂しい笑いでもあった。壁紙を壁面の半分ぐらいつけた頃に、妻はいち早く後ろに下がって私の動ける空間を作った。壁紙の下半部をセメント壁面に密着できるよう手伝ってくれた。それから流し台の水気を取る時に使う小さなガラス拭きで壁面をさつと擦った。壁紙貼り用のブラシがなく、適当な道具を探して考えついた方法だった。ガラス拭きが上から下へ、左から右へ往復運動するたびに、水で膨らんだ糊が下にたらたらと落ちた。そのため、あらかじめ床には新聞紙を敷いておいていた。周囲に糊の臭いが広がった。私が丁寧に刷毛塗りをしている間、妻は壁紙の上だけでなく、床に飛んだ糊を濡れ雑巾で拭いた。一連の過程を終えてから、ちよつと下がって正面から見た。覆盆子液の染みが汚らしく残っている横の壁面に比べて傷もなく綺麗な壁を見ると、一家の主人として「何かした」という自尊心を感じた。蛍光灯を替えるとか、詰まった下水口を通した時の感情と似たようなものだ。

—簡単だね。すぐに終わりそうかな？

流し台で手を洗ってから、妻と二回目の壁紙を持った。それから最初の壁紙貼りと同じことを繰り返した。浴槽に紙を入れ、糊が水を吸ってふやけるのを待った。そうすると、裸になったヨンウの小さな体とお尻の青い蒙古斑、ぷくくと膨れたお腹、柔らかく暖かい皮膚と気持ちいい匂いが思ひ出された。妻も私と同じ思いをしているのは、明らかであつた。私たちは何も言わなかつた。

—台所の窓、ちよつと開けるか？

—うん。

妻が流し台の前の小さな窓を開けた。小さな四角の窓枠から強い風がつむじを巻いて入ってきた。妻が体をぎゅつと縮めた。

—風が冷たいわ。

—閉めるか？

—いいや、ちよつと開けておいて。臭いもちよつとあるから。

私は壁紙から手を離さないで、妻を見た。

—だったら、ここの下をちよつと持つてくれ。

その間に順序とやり方に慣れた妻が、自然と壁紙の下段を持った。立っていることと座っていることだけが違うだけで、私と同じ姿勢だ。

—十一月だわね。

—普段無愛想な妻が言う言葉に、私は今更のようにしびれた。

—そうだねえ。

—すぐに冬の布団を出さなきゃね。

—ああ、朝方ちよつと寒かったなあ。

—そうですよ。

—ああ。

—春夏秋冬の四季のある国に暮らすのは、お金がかかるみたい。

—そうだろう。

—ねえ、あなた。

—うん。

—一人働いているから、大変でしょう。

—何、いつもしていることだよ。

—私をご飯もちゃんと作ってやれなくて。

—自分だけでも、きちんと食べなさいよ。

—あなた。

—どうした？

— 私たち、今日壁紙貼りが終わったら、来週に。

— …

— あのお金、おろしましょうよ。ローン、返さなくちゃ。

— …

危うく涙がこぼれるところだったが、何とか我慢した。ローンについては他に方法がないと考え
ると寝付かれず、もしあのお金をおろそうと言えば怪物になったと思われやしないかと悶々とした
日々が思い出された。

— ねえ、そうしましょう、あなた。

何とか呼吸を整えて、淡々として答えた。

— そうだね。

ガラス拭きで壁面を丁寧にこすりながら、ぼこぼこ浮かんた部分を真っ直ぐにのぼした。そして
心の中で「今日は妻が起き上がる日なんだ。今立ち上がろうとしているところなんだ…」と思
った。だから今日は私にもヨンウにも重要な日なんだと。壁紙を持ち上げ、両腕に力が入った。ガ
ラス拭きで壁紙をしごきながら壁面の中間ぐらいに下りてくると、妻が私の後ろから退いて、私の
動く空間を作ってくれた。壁紙が全体的に所定のところにつくと、妻が濡れ雑巾と乾いた雑巾を使
って、紙の上の糊を拭き取った。

— ここに引越してきて、本当によかった。あなたもそうだったでしょう？

—うん。

—私たちが暮らしてきたなかで一番良かったじゃない。そうでしょう？

—そうだった。ローンのことで眠れない時があったほどに、ここは良かったのだ。どこかに辛うじて到着したという感じ。そこは円の中心ではないが、だからといって円の外に弾き飛ばされることもないという大きな安堵が押し寄せて来ていた。私の身でこの程度なら、遠くに来たものだ。欲を出さないで感謝しながら生きようと誓ったのは、ついこの間のことのようにだ。ヨンウが旅立って急にもすごく静かになったこの家で、今にも破れそうな壁紙を妻と一緒に持っている所、結局到着した所が「ここだったのか？」という疑問が湧いたことがあった。絶壁のように切り立ったこのセメント壁の下だったのかという。私たちが二〇年間賃貸住宅を漂った末に苦労して根を下ろした所が、すなわち初めて定着したと安心した所が、実は自分のものではない虚空だったんだと思つたことがあつたのだ。

—あなた、あそこの紙、しわが寄っているみたいよ。やり直さねばいけないのかしらねえ。

—どこ？

—あそこ。

—大丈夫。何日かしたら、吸着するさ。

—あそこは曲がっているようだけど？

—どこ？

壁面から何歩か離れて壁紙の模様と縦線をじっくり見た。

—僕にはよく分らないんだけど。

—いや、こっちの方に少し傾いている。

—ああ、そうだねえ。

二回目の壁紙の一部をゆっくり剥してから、バランスの良いように貼り直した。幸い糊は直ぐには乾いておらず、修正が可能だった。

妻と最後に残った壁紙を持って浴室に移動した。今三回目の壁紙を貼るだけで、全てが終わるところだった。

—一つ一つではなく、ひとまとめに浸けておけばよかったのに。

—糊が乾くかと思って、そうしたんだ。

—ちよつと、これ片付けてから。

妻が壁面下の収納箱を後ろに下げた。一方の面がぼっかり空いた四角い箱型の家具だった。私はそれをヨンウの食卓用椅子の横に置いて、補助椅子兼収納箱として使っていた。テーブルを居室に移す時に一緒に片付けようかとも思ったのだが、壁紙貼り中に手が届かない所があればその上へ上がつて立つつもりで残しておいたのだった。収納箱を持ち上げると、床に白っぽいほこりが四角く現れた。妻がキッチンタオルを水に浸けている間、私は二回目の壁紙のすぐ横に三回目の壁紙

を重ねた。雑巾掛けで体を動かしている妻の小さな背中が見えた。私は、妻がすぐにほこりを拭いて取って私の方に来て壁紙の下端を持つてくれるものと思った。ところが、小まめに雑巾掛けしていた妻が急にびくりともしなくなつた。

—おい、お前。

—……。

—何、お前？

—……。

—ミジン、どうしたの？何かあつたの？

私は両手を壁から離せないまま、妻を見下ろした。

—あなた。

—うん？

—ここ……ヨンウが何か書いていた……

—……何だつて？

—ヨンウが自分の名前……書いていた。

妻が震える手で、壁の一カ所を指差した。

—しかし……書けなかつたと……。

妻の肩が微かに震えた。

—まだ元気で……。

妻の体が微かに震えた。

—「○」と……。

……。

—「○」と、いや「○」以外は書けなくて……。

妻は涙をぐつとこらえようとして、結局泣き出してしまった。私はヨンウが自分の名前を書くのを一度も見ることがなかった。時おり部屋の床やスケッチブックに、絵でも字でもないぐねぐねとした何かを書き散らしていることだけを知っていた。ところが、思い通りに座ったりハイハイも出来なかった子供が、ある瞬間に「ㄱ」や「ㅇ」を書いていたなんて。そうなら感心だと頭を撫でてやりたかった。ヨンウの頭の動きは、どれくらい粘り強く柔らかかったのか。たった一回でいいから、どんな対価を払ってでもヨンウをまた抱いてみたい。それだけでも出来るのなら、何でもするのだ。その場に凍りついた私たち二人の間に、十一月の風が激しくえぐった。

—思い出すわ。

—何が。

—ヨンウの目。

……。

—火を見ていた子供の目。

……。

—私の誕生日にあなたがケーキを買ってくれたじゃないの。このテーブルで一緒にローソクに火を点けて。その時ヨンウは生まれて初めてローソクの火を見たのだけれど、火を何かとても不思議なものを見るようにじっと見てたじゃない？その日私が、二歳にもならないヨンウに「ヨンウや、今日お母さんの誕生日なんだけど、何してくれるの？」と聞いたら、ヨンウが何をしたか、知っている？言葉も言えないあの子が、何か困ったという表情をしたら、いきなり私に拍手をしてくれたのよ。ヨンウが私に手を叩いてくれたのよ。この日に生まれたと……。

妻は、演奏を終えた後に数千人の起立拍手をもらった。ピアニストのように泣いた。人が投げた花に包まれて……。花に埋もれて……。軒先の下で雨を避ける人のように、私が立って持ち上げている壁紙の下ですすり泣いた。薄黄色の地に名前の知らない白い花がぎつしり一杯印刷された紙が妻の頭に載ったのだった。その花は、まるで誰かが妻の頭の上に投げた弔花のように見えた。生きている人に悪意で投げた菊の花のようだった。私たちには分かっていた。最初は溜息とともに憐みを表してくれていた隣人が、その後私たちとどのように接するようになったかを。彼らはまるで大きな不幸に感染でもするかのように、私たちを避けてこそこそ話をした。残酷な言葉を言い触らし、疑い、見物した。だから白い花がたくさん描かれた壁紙の下で縮こまって座っている妻を見ると、妻が町の人たちから「花のムチ」を打たれているように感じられたのである。多くの人たちが「私がこれくらい泣いてやったのだから、お前はもう泣くのを止める」と、茎の長い花で妻をムチ打っている

ように思えた。

—他の人たちのことは、分からない。

私は思わず妻と同じことを言った。

—他の人たちのことは、分からない。

そう言った時、私は妻の言葉を理解しているのだと思った。妻がじつと私を見上げた。虚ろな瞳が消えた蛍光灯のようだった。妻は片手で、ヨンウが自分で書いた、いや書きかけた名前を触った。その瞬間、どこからかヨンウがたつたつと走つて来て、両腕で私の足を抱き締めるような気がした。どこで習つたのかとんとんと自分の母親の背中を叩いてやるのも、そんな気がした。しかし、そんなことは実際には起きはしない。これから絶対起きないのである。その単純な事実が私の胸を深くえぐり取る。私は結局頭をうなだれてしまった。台所に床に涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。しかし、その瞬間すら手から壁紙を離すわけにいかず、だからといって離さないままでいることも出来ず、両手を上に挙げる罰で立たされたようだった。水を吸った糊が、私の体から吹き出る膿のようにならたらと落ちた。冬の到来はまだだが、全身がわなわなと震えた。そして両腕がぶるぶると震えた。